

モンゴル帝国の出現

1) モンゴル帝国の起源

モンゴル高原は、ウイグル滅亡(840)以来、トルコ系・モンゴル系の遊牧諸部族が約350年にわたり割拠抗争し、10世紀初め以降、諸部族の多くは契丹(遼、キタイ)に服属したが、契丹は1125年、金に滅ぼされた。大興安嶺 シンアンリン 方面にいたモンゴル部(～部とはその地域で生活する部族のこと)は、12世紀後半にはモンゴル高原中心部に進出した。

モンゴル部は、12世紀末、テムジン 1162?-1227 が指導者となると急速に台頭した。モンゴル諸部族を統一したテムジンは、1206年諸部族長を集めた【1: 】において、君主(ハンあるいはカン)に推戴され、【2: 】(成吉思汗)位1206-27と名乗り、国号を「大モンゴル国」と称した。これが【3: 】の起源である。

[今日のモンゴル高原] ソ連に次ぐ人類史上2番目の社会主義国(1924年)であったモンゴル人民共和国は、1992年、社会主義を放棄、国名もモンゴル国となり、急激な資本主義化で貧富の格差が拡大している。社会主義時代、「帝国主義的である」として教育が禁じられていたチンギス=ハンについては、国家創成の英雄として復権に力を入れ、紙幣にも使用している。その英雄視は、やや力が入りすぎの観もあるが、社会主義時代に全く省みられなかったチンギス=ハン時代の遺跡の発掘や保存にも力を入れている。

2) チンギス=ハンの偉業

チンギス=ハンは、千戸制を創設した。これは服属した全騎馬遊牧部族を千戸単位に95の千人隊(千戸集団)に再編成、功臣に率いさせた。95というのは創設時で、当然その後増設された。従来の部族連合国家ではなく、チンギス=ハンとその子孫に権力を集中させた。モンゴル高原は彼自身、東方は弟たち、西方は息子たちが固め、引き継いだ。

モンゴル帝国軍の強さの秘密は①軽装備の騎兵だけの軍隊(1日で70km移動。歩兵は30kmが限度)。②小柄でタフなモンゴル馬を軍馬に採用。③強力な弓を多用、白兵戦による兵員の損耗を防ぐ。④厳格な規律。⑤ムスリム商人の協力。⑥実力主義。後掲3)のように遠征を行い、交易路と農耕地域の確保に努めた。

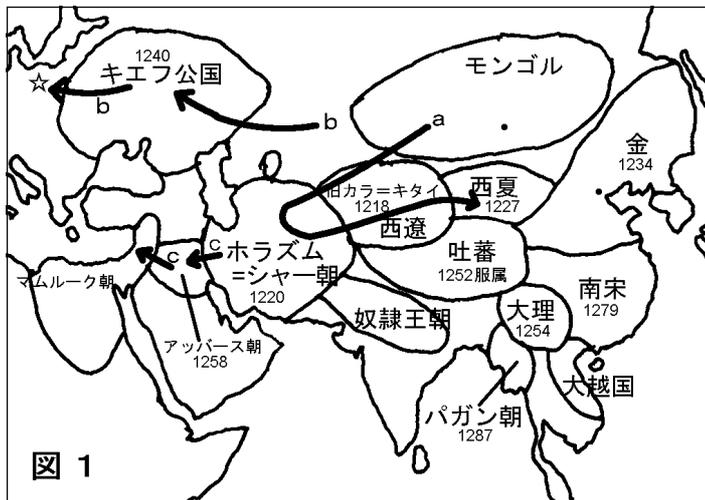


図 1

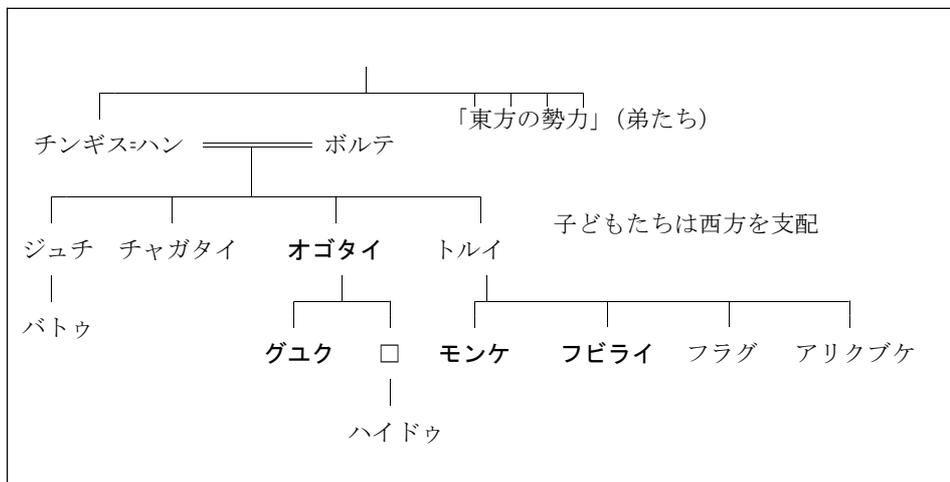
3) チンギス=ハンの遠征

- ①金を攻撃した(1215年)が滅ぼせず(1234年、金を滅ぼしたのはオゴタイ)、図1の矢印aのように【4: 】した。
- ②ナイマン部が王位を奪った西遼(カラ=キタイ)を滅ぼした(1218年)。
- ③【5: 】を征服(1220年)。
- ④【6: 】を滅ぼした(1227年)。

この他、西北インドやロシア南部にも侵入している。内陸アジアの騎馬遊牧民のほとんどがチンギス=ハンのもとに結集した。この国の支配層に加わる者は、出身にかかわらず、「モンゴル」とされ、「モンゴル人」意識を共有した。

1227年、チンギス=ハンは波瀾万丈の生涯を閉じた。生前、第3子のオゴタイを後継者に指名していた。オゴタイは近年オゴデイとも書くが発音表記が異なるだけである。同様にフビライはクビライとも書く。

- 4) チンギス=ハンと妻ボルテの間に、第1子=ジョチ、第2子=チャガタイ、第3子=オゴタイ、第4子=トルイが生まれた。4人とも有能で父と協働して外征し、よく父の期待に応えた。ジョチとチャガタイは不和。穏和なオゴタイは兄のいずれとも仲が良い。モンゴル高原の末子相続の慣習によれば後継者は人望厚いトルイだがトルイは固辞。1229年、クリルタイで第3子のオゴタイが第2代モンゴル皇帝に即位することに決した。(チンギス=ハン没の2年後)



父チンギス=ハン、長男ジュチ(ジョチ)には他部族に略奪された後奪還された母から生まれたという共通点があり、父は自らの武勇で『蒼き狼』の末裔であることを証した。ジュチとチャガタイの不和は「ジュチが実子でない」疑惑が発端とされ、歴史小説の格好の題材となっている。チンギス=ハンはジュチを実子と認めている。なお、略奪された妻を奪還するストーリーは騎馬遊牧民の英雄譚によくある。
→ 井上靖『蒼き狼』、陳舜臣『チンギス=ハンの一族』

上の略系図において、即位順に番号を付し、ハーンを○で囲め。ハーンは大ハン、大ハーンと同じ。後掲5)参照。

- 5) ハンはkhanとアルファベット表記されるがkhaの発音は日本語にはなく「ハ」でも「カ」でもない。ハンとカンが日本語

